

出来たらどんなに素晴らしいことでしょう。

エック、お互いがんばりましょう。ごきげんよう。

△横浜市西区・中学生・一五歳▽

サワデーカー。

●市民作文「わたしの中のアジアと日本」最優秀賞作品

② わたしの中の地図・日本と東洋と

沢 宇実

もうずっと昔、十数年以上前になるが、学生としてパリに滞在していた時のひとつの情景がまだに私には忘れられない。それはちょうど夏の終り、私が寄宿していたスペイン人修道女の経営する

女子寮でも、永い休暇を利用してフランス語を勉強しに寄り集まってきた学生たちが、各々の国に散りだした時のことなのだが。建物の中は娘たちのざわめきで騒然としていた。そんな中で、突然、韓国人留学生の大声が響いた。私たちは日本語で語り合う仲だったので、何事かと飛んで行ってみると、小柄な彼女の眼の前に、履き古された大きな靴が幾つも転っていた。「ひどいわ。いらんかいらあげる、と言ってメキシコの女の子が

私に投げつけるように置いていったの。すごい侮辱よ。東洋人のひとりとして決して許せない！」

その東洋人のひとりという言葉に私は衝撃を受けた。私の中には、私は日本人であるという自覚はあったが、東洋人であるという意識は見つけることができない。パリの路上で我々はたびたび異国のさまざまな男から声をかけられたものだが。「中国人かい。ヴェトナム人？」。その都度私の仲間はむきになって叫びかえしたものだ。「日本人ですよ」と。その声の響きには、間違えられちゃ困る、という得体の知れない一種の傲りが潜んでいなかったらうか。私たちの中に東洋の仲間としての連帯感があれば、

ヴェトナム・中国、あるいはタイ人と言われようが、微笑して聞き流すことができたのではないか。

一韓国人のひと言から受けたショックは今もなお、あるいはより明確に私の中に蘇ってきて問いをつきつけてくる。お前の地図は東洋まで拡がったかい、と。

現在私は横浜中華街と山下公園にはさまれたところに住んでいる。私共の部屋は子供ふたりの成長とともに手狭になってきたので、早晚、主人の通勤により便利な余所に引越すことになるだろう。あの夜、私は一〇階の窓から夏の夜空に点滅する中華街料理店のネオンを見下しながら、何となく感傷的な気分になっていた。山下公園の銀杏並木も元町も外人墓

地も、それに中華街ともいつかさよならする時がくるだろう。日本の中でも特殊な雰囲気のあるこの界隈を私は愛してしまっているのに、特に華僑のこんな大きな集団はよその土地には無いだろうに、一体私はあの人達の何を見、何をわかったのだろう。ただ、外側から遠眼で覗いただけだ。あの人達のことを少しでも知りたい。仲良しになりたいなあ、と私は思わずにいられたかった。

偶然、そのチャンスは間もなくやってきた。中華学院保育園で園児を募集している情報を得たのである。たまたま、下の娘が三歳になると同時に、急に外界に關心を示し、友達を求め出したのに、家の周辺には恰好のお仲間が居なくてかわ

いそうに思っていた矢先であり、私は主人の承諾を得て、入園の申込をした。国籍を問わないことはもちろん、日本の保育園のように面倒な条件もなく、簡単に娘は入園許可を得ることができた。

中華学院保育園(台湾系)は目下、園児はほぼ五五名、印度人、韓国人、母親が英国人などといった異色を除いて、中国、日本の子供たちが約半数ずつを占めている。中華の人といっても、園児の親は日本で生れ、育った若い世代の人ばかりで、一見したところ日本人との区別はつかない。彼らのもつまさまの個性は、きつと日本人にも見出せる各個人の違いと同様であろう。初め意識疎刺であった私も、自然に打とけて行き、娘に親友ができて行くように、私にも親しい友人ができてきた。

「外部の者立入禁止」の札の掲げられている中華学院の門内に足を踏み入れて、早くも既に二年近くが経過している。この学校に娘がお世話になってほんとうに良かった、とつくづく思う。間もなく娘は日本の幼稚園へと巣立って行くのだが、卒園を前にして私にはたくさん感慨が押しよせてくるのである。他の父兄より自由な時間が多かった私は、保育園のこまごました雑用をお手伝いして

きたため、主任の先生とかなり親しい間柄になったのだが、その老師から先日、あなたの笑っている写真を自分の部屋に飾って、私も笑い返しているのよ。あなたの誕生日にはその前に花を飾って、お祝いするわ、と言われた時、その情の深さに泣けてしまった。

中華の人、日本人などと分けて、あれこれせんざくすることは、もう大した問題ではない。けれど、私の中の狭い根性、細い神経に思いあたるとき、彼らの気性に、何か自分よりずっと大きいものを見出す気がするのである。彼らの中に流れる祖先からの血とでも言おうか。強いてことばに表わすなら、図太い骨格、しかも細心、勤勉。情の勝った人間性。物事にこだわらない楽天性、生への貪欲さ。団結する力、などなど。

ところで、家が近いので、朝、子供を送って行く時、たびたび出くわす若い台湾人の親子と私たちは仲良しになった。日本で産れた五歳と四歳の女の子を保育園にあずけて、父親は中華街のお菓子の工場で、母親は料理店でウェイトレスをして働いている。一家の主には、三年毎にビザの切換えが必要で、期限切れが迫ると国に一旦帰り、日本で仕事の再契約が出来れば、また日本に戻ってきて、不

成立の場合是一家で台湾に引揚げねばならないという。昨年の夏、父親はビザの切換えのため、三カ月以上単身帰国していたが、その間妻は愚痴ひとつこぼさず、憂いを外に現わさず、運命の決まるのを静かに待っていた。あなたも台湾に帰りたくない?と尋ねると、日本の方がいいです、と答える。そこに複雑な台湾の国情を、私は垣間見る思いがした。

最近彼らの日本語は格段に上達したが、当初私たちは、微笑と目顔で話し合ったものだ。けれど私には、ことばが思うように通じない故にむしろ、直截心の交換ができることを知った。ことばは交すのに、心は触れ合わずに通じすぎる人間同志が、自分の周辺にあまりに多い気がする。

外国での暮しは、不自由することがいっぱいあるのを私は経験上知っていたから、私は何かお役に立ちたいと、心をくいだいた。保育園で、子供の昼寝用にタオルケットを持参するよう指示があったとき、私は勇んで、まだ使っていない軽い毛布を、よかつたら持って行ってねと言って差し出したり、バーゲンの子供のパンツを自分の娘のと一緒に幾枚も買いこんで、恐る恐る手渡したり、私はたえず彼らに気を遣うようになった。

でもあの時、自分の行為は間違っていないのではないかと、私は考えこんでしまった。そして、とても、とても恥しい気持ちに襲われた。私が、やさしさ、と思いついて行っていた行為を受ける側の立場になつて考えることを、私はようやく気付いたのである。ああ、そうだ。かつてのメキシコの娘のように、私の中に思いあがった気持が心のどこかに、ちょっぴりでも無かつたといいきれるだろうか。

純粋な友情は対等でなければならぬであろう。両者が好意を交し合い、理解し合い、それを深めて行くように努めること。そして相手がほんとうに困っている時、自分に可能なかぎり、手を尽すことである。今私たちは手を貸す立場に在るかもしれない。が、この一見したところのゆとりは何時まで続くだろうか。私は謙虚に自分を見つめ、相手を見つめ、今自分には何が出来るか、何をすべきか、相手に何を求めるのか考えて行く。中華学院の二年間が娘の記憶から無くならないよう私は努めたい。そして子供と一緒に、日本の地から東洋に、さらに世界へと拡げて行きたい。この燃える思いを、今私はしっかりと心に留める。

●市民作文「わたしのアジアと日本」最優秀賞作品